

4 資料

(1) 「小学校英語活動実践の基本」

「小学校英語活動実践の基本」

昭和女子大学附属昭和小学校

校長 小泉清裕

○公立小学校における英語の変遷

2011 年度から、全国の小学校で 5 年生と 6 年生が週 1 回の英語活動を行っている。正式には「外国語活動」であるが、ほとんどの場合、英語でその活動を行っているため、ここでは「英語活動」という表現を使用する。

1992 年に、大阪の味原小学校と真田山小学校が、当時の文部省から英語教育についての研究開発学校に指定された。これが、公立小学校での英語教育が話題になった最初の出来事である。言い換えれば、1992 年が日本の公立小学校英語教育元年である。

それ以来、急速にその研究開発学校を増し、約 20 年を経て、2011 年度から全国の小学校で「領域」という枠組みの中で英語活動が実施されるようになった。そして、今後、2020 年をめどに、学年や時間数を増やすことが計画され、5, 6 年生においては教科化が想定されている。

これからの小中高の英語教育の方向性については、文部科学省がホームページ上で「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」という計画を提示しているのでそれを参考にしたい。

○世界にある言語数

世界には 200 ほどの国しかないが、言語の数は 6000 語以上だと言われている。国の数の 30 倍もの言語があるということになる。カナダでは英語とフランス語の二つが使われ、スイスではフランス語、ドイツ語、イタリア語ともうひとつの言語がつかわれている。一口に中国語と言っても、北京語、広東語、福建語などのように相互に意味の通じ合わない言葉がある。フィリッピンには 7000 を超える島があり、島の数だけ言葉があるといわれているが、実際には母語としてつかわれている言語は 170 ほどあり、そのために国民の共通の言語として英語も公用語になっている。意外なことに、アメリカ合衆国でも英語だけでなくたくさんの言葉が使われ、それこそ多言語国家の見本のような存在である。世界では多言語国家の方がはるかに多く、一国一言語の日本のような国の方が珍しい国だと言える。

6000 語の言語のうち、母語として最も多くの人が使用されている言語は、約 8 億人の人が使用している北京語だと言われている。次いで英語が第 2 位だと言

われているが、母語だけでなく公用語として使用される数になると、一説には 10 億人とも 15 億人とも言われ、第 2 言語として使用できる人の数になると 20 億人に達するという想定もされている。

イギリスという小さな島国で生まれた英語が世界に広まり、多くの人が相互に使用できる言語になっていることになる。このように世界で使われている英語は **World Englishes** と呼ばれ、すでに英語はイギリスやアメリカの言葉ではなく、世界の言葉として動き出している。そして、それぞれの使用者によってさまざまな発音や表現もあるが、それでも相互に理解可能な言葉として多くの人に使用され、今後、その使用者の数はさらに増えていくことになる。

○人間が言葉を使える理由

人間が母語として音声的に言葉を獲得するのには約 1 万時間が必要だと言われている。0 歳から 5 歳ごろまでに、他の人とのかかわりの中で言葉を聞いたり話したりできる時間は約 1 万時間と想定されている。そこで、人は 5, 6 歳までに言葉のある程度自由にしゃべれるようになる。

では、サルに 1 万時間日本語を聞かせたら、サルは日本語を話すようになるだろうか。それはあり得ないであろう。人間は 700 万年という、長い人間の歴史の中で言葉を使うという能力を遺伝子上に獲得してきた。鳥が空を飛び、魚が水中で呼吸をするように、人間として生まれてきたことで、言葉を使用できるという遺伝子を体の中に保持しているわけである。その遺伝子を活かす環境があれば、人間は言葉を使えるようになる能力を最初から持って生れてきているということになる。私たちは 700 万年の人間の歴史に支えられて言葉を使用しているのである。

○言葉の習得の第一歩

人間として言葉を使う能力があったとしても、幼児が言葉を習得していくのにはその順序がある。生まれた時から、(生まれる前からとも言われているが) 母親を中心にして、周囲の人の使う言葉を聞いている。そして、半年ほど経つと、喃語(なんご)と言って意味がわからない言葉を発し始める。そして、1 年から 1 年半ほどで、最初の意味のある「ママ」や「マンマ」のような言葉を発する。

この時、幼児の体の中にはこの言葉だけが入っているのではなく、もっとたくさんの言葉が蓄えられている。そして、その中から自分で選んだ、最も重要な言葉から発するわけである。これが発話、すなわち **speak** である。この一言を言うまでに、1 年以上の間、人の話を聞いている時間がある。それは、コップにわずかずつ水をためるようなもので、1 年以上かけてコップに水をためていっ

ばいにして、そのコップにさらに水が数滴入った時、あふれ出た水が「ママ」や「マンマ」になるということである。多くの言葉が入ってからでなければ発話はおこらない。話す前に大量な言葉の蓄積が必要なわけで、言葉を丁寧に聞かせることが、言葉の学習において最初の、そして、最も重要なことである。

言葉の習得には「聞く」「話す」「読む」「書く」という四つの技能があるが、すべては「聞く」ことから始まる。聞いたことのない言葉は話せないし、読むこともできないし、さらに書くことは不可能である。言葉の習得では「聞く」ことがいかに重要であるかを、英語活動においても意識しておくべきである。

○何ために英語活動を行うか 「目的」と「目標」の違い

毎日ジョギングをしている人は、何のためにジョギングをしているのだろうか。マラソン大会に参加するために行っている人、健康維持のために行っている人、その中でも特にダイエットのために行っている人、医師からの指示を受けてやむなく行っている人、心をリラックスさせるために行っている人、友人や家族との共通の時間をもつために行っている人など、同じようにジョギングをしていてもその目的はいろいろある。

そして、その目的に合わせてジョギングの方法も違ってくる。スピードや距離、走る場所、一人で走るか家族などと一緒に走るか、黙々と何も言わずに走るか、ゆったりと話しながら走るかなど、さまざまな違いがある。

目的があれば、その目的を達成させるための目標が出てくる。体重を減らすためにジョギングを行っているならば、最初の目標は **2kg** の減量であったり、マラソン大会への出場目的ならば、規定の距離を規定の時間で走ることが目標になったり、友だちとの親睦が目的ならば、みんなで足並みをそろえて走り、走り終わった後の楽しい会話の時間をもつことが目標になる。

目的は最終的にめざすものになる。言いかえれば、目的は遠くに光る星であって、その星に向かうためどのように進んでいくか、そのルートを示したものが目標である。ルートにはそのルートが間違っていないことを確認するポイントが必要であり、それらのポイントが目標になる。ひとつの目標ポイントに達成したら、次の目標に向かって進んでいくということになる。そして、目的に近づいていくために、いくつかの目標を設定することになるわけである。

○小学校英語活動の目的

小学校で英語活動をするということは、小学校教育をより良くするためであり、目的は「小学校教育の充実」である。結果として、中学校や高等学校、そして大学での英語教育の進展に寄与することができるならばそれはさらにうれしいことだが、中学校の英語教育をサポートすることが主目的になるのでは、

それは中学校での英語の時間を増やすことの方がいいはずで。あくまで、小学校英語活動の目的は小学生にとって、その時期に英語活動で体験したことがその後の人生でどのような糧になるかが最大の目的となる。

私たち小学校教師が意識すべきことは、小学校英語活動は新しい教育であるということである。中学校の英語教育と同じ目的や同じ方法で行うことではないことをしっかり認識する必要がある。自分たちが受けてきた中学校の英語教育とは一線を画し、小学校でなければできない、そして小学校だからできる英語活動にすることをめざす必要がある。

○めざすは「肉じゃが」作り

「肉じゃが」を作る時のことを頭に描いてほしい。「肉じゃが」には肉とじゃがいもが当然必要であり、その他に入れるとすれば、玉ねぎ、にんじん、しらたきなどであろう。

小学校教育はひとつの鍋でつくられる、この「肉じゃが」のようなものだと考えられる。小学校教育という「肉じゃが」にとって、中心食材のじゃがいもは国語であり、そして肉が算数、玉ねぎとにんじんが理科と社会。脇でいい味を出している醤油や砂糖が音楽や体育、図工であって、それらがなく「肉じゃが」にはならない。そこに、さらにもうひとつの調味料を加えていいと言われたら、さて何を加えるか。私ならばまちがいなく「みりん」を選ぶ。醤油と砂糖だけでも「肉じゃが」の味は整うが、たとえ少量でも「みりん」が入れば味や照りに多少なりとも変化がおこる。

英語活動は小学校教育という「肉じゃが」に適した「みりん」になることが必要である。ワサビならば「肉じゃが」には入れてはいけないということになる。わさびは決して悪い調味料ではないが、「肉じゃが」という小学校教育には合わない。英語活動がタバスコならばこれも「肉じゃが」には加えない。わさびは刺身に、タバスコはピザやスパゲッティには使うが、「肉じゃが」には適さない調味料である。

現在小学校で行われている英語活動が小学校教育にとってワサビやタバスコでなく、小学校教育に適した「みりん」であるかどうかを検証する必要がある。小学校で行う活動はすべて小学校教育のために有益なものでなくてはならないし、すべての教科や領域が相互に自分の味を出し合い、全体としてのおいしい「肉じゃが」として存在しなければならないはずである。英語活動も自分のもっている特性を発揮して、小学校教育をより豊かにするために活躍させてやる必要がある。

小学校英語活動の目的は小学校教育の充実であり、英語活動だけを単独なものとして考えるのではなく、他の教科と結び付け、小学校教育をより豊かにす

るための素材として扱う必要がある。そのためには、担任教師がそこに加わらなければ、この目的は達成できるものではない。

○実施上の注意点

①「聞く活動」を重視

小学校英語活動でめざすべきことは、いかに子どもたちに英語を聞かせるかということである。「聞く活動」には二つのものがある。ひとつは、「音を聞く活動」であり、もうひとつは「意味を聞く活動」である。

英語の音の特徴を聞き分ける活動と、その音から意味を理解する活動とに分かれる。音の特徴をとらえて日本語の音との違いを感じ取る活動は、幼稚園や小学校の低学年での実施に向いている。歌や絵本などがその活動を支えてくれる。一方、意味を聞く活動は、中学年以上の活動として適している。教師が英語で何を言っているか児童が理解しようとすることで、類推する力を養う活動になる。この類推力は言語の活動、特に外国語活動では非常に大切な要素である。

②すぐに英語を言わせようとしない

「聞く活動」を重視するということは、決まった表現を覚えさせて、それを何度も練習し、意味なく子どもたち同士で言わせるような活動をめざさないという提案でもある。子どもたちが英語を口にしてしまうと学習効果が高まったような気になるが、実はこれは赤ちゃんが「ママ」や「マンマ」という自主的な発話、いわゆる *speak* ではなく、言わされている *repeating* や「オオム返し」と言われる *parroting* という活動でしかない。このような活動は忍耐を必要とする活動で、一見英語が言えたような気になるが、その後、その表現を使う機会ほとんどないため、記憶から消えていってしまう、その場限りの活動でしかない。繰り返しこのような活動をしていると、多くの子どもたちが英語から離れていってしまうことになる。人間が遺伝子上に持っている「言葉を学ぶ力」をもっと信じて、丁寧に言葉と向かい合わせるべきである。

③先生が質問し、子どもたちが英語 1 語で応える活動をする

子どもたちからの発話として期待できるのは、1, 2 歳の子どもの返事をする時のように、単語での返事ができればいいというくらいの気持ちである必要がある。教師が英語で質問をして、そのこたえとして、英語の単語 1 語で反応できればよしとすることである。例えば、何色が好きか尋ねる場合、教師の *What color do you like?* の質問に対して、*Red.* や *Green. Blue.* とこたえられればいいということである。日本語で同じ質問をされた時、「赤。」や「緑。」とこたえる方が「私は赤が好きです。」のこたえよりもずっと自然に感じるはずである。英語でも同様に、*I like red.* のこたえよりも、*Red.* や *Green.* のように、1

語での応えの方が表現として自然である。必要なことは、What color do you like? の質問の意味がわかることである。意味がわからなければ、Red.のこたえを言うことはできないはずである。教師がいろいろな質問をして、それに子どもたちがこたえようとする気持を持たせることが小学校英語活動の原点である。

④各教科とのつながりを大切にする

では、どのようなことを教師は話してやるのがいいかというと、小学校英語活動は小学校教育をより良くするために行われるということを意識するべきである。小学校英語活動は中学校英語教育の前倒しをするのではなく、小学校だからこそこできることが必要になる。

そこで提案したいことが、各教科での学習内容と英語活動をリンクさせることである。3年生の社会科で学習した地図記号を活用して、それぞれの記号の英語での言い方を取り入れたり、漢字を活用して、水母（海月）が jellyfish, 海豚が dolphin, 河馬は hippo になるなどの活動もとりにいれたりすることもできる。算数の内容は特に利用度が高いし、反対に算数の時間に英語で質問をし、児童がその答えの数字を英語で言うことなどもできる。理科では野菜や果物の花や実と色の活動をリンクさせることもできるはずである。教師のアイデアが見事に生きる英語活動になり、まさしく小学校ならではの活動になる。

私たちが中学校や高等学校で学んできた英語学習の方法だけが、英語の学び方ではないということを、小学校の教師が理解してほしいと願っている。中学、高校の英語は主にテストの採点をしやすくことが利点としてあげられる。しかし、言葉の学習はテストのためにあるのではなく、人と人とを結びつけるための手段として行われるべきである。まず、英語を仲介にして、先生と児童を結びつけるための英語活動を実践してほしい。児童相互に英語でのやりとりをさせるのは、中学校の後半や、高等学校になってからの活動である。まず、母親と幼児が言葉のやりとりを行うように、先生と児童での英語での言葉のやりとりを経験すべきであり、急ぎ過ぎることは決してよい結果にはつながらない。

○教師が使う英語について

小学校英語活動では、教師が英語で児童に話しかけ、それに児童が 1 語の英語でこたえられることをめざす場合、教師がその英語を使えるかどうか、最大のポイントになる。この場合、教師が使う英語は中学 1 年生の英語の教科書に登場する英語表現を主にして対応することで、教師にとっても無理なく英語が言えるし、児童にとっても、わかりやすい英語を聞くことができるという利点がある。

しかし、私たちは誰でも中学 1 年生の時に英語学習をしてきているが、その英語を使う経験をほとんどしてきていないことも事実である。中学 1 年生の時

に学んだ英語を、自由に使うための初めての体験として、英語活動を意識することで、気楽な英語活動になるはずである。自分が言いたい英語はすべて英文としてノートなどに書いてみて、活動ではそのノートを見ながら、自分の書いた英文を読むことで対応することができる。英文を覚えて、それを思い出すよりも、読むほうが自信をもって英語を発音でき、安心して児童に英語を聞かせることができる。また、英語を書いておけば、その英語を ALT や英語の堪能な人に見てもらい、修正をしてもらうことができる点でも効果的である。

「書けない英語は話せない」ということを理解して、とにかく、言いたい内容を、中学 1 年生レベルでのやさしい英語で表現することを学んでもらいたい。中学 1 年生での英語は誰でも学んだ経験はあるが、中学 1 年生で学んだ英語を使ったことがないということも事実である。

まず、小学校教師自身が英語活動に興味をもって、児童と一緒に自らも実践することで、英語に対する教師の意識に変化が起きる。教師が英語活動を楽しもうとする気持ちで実践をすることが大切であり、その気持ちで取り組めば、1 年もしないうちに、中学 1 年生の英語で、十分に英語活動の実践ができることを感じるはずである。このような形式で英語活動を何度も実践することで、自分自身が海外旅行に行った時などに、英語が口から自然に出てくることを実感するはずである。

○まとめ

紙面の関係で、詳細に伝えられなかった部分も多くあるので、小学校英語活動を行う上で児童がめざすべきことと、小学校教師がめざすべきこと、さらに英語活動をサポートする ALT や中学校の英語の教師が注意すべきことなどを以下に列挙した。

個々の項目を理解して、小学校ならではの英語活動を行うための方法を、他の教師と一緒に検討しながら、児童の将来に役立つ英語活動の実践をしてほしいと願っている。

①児童がめざすこと

- ・「聞く力」を伸ばすために「聞こうとする気持ち」を高めること
- ・英語で話されていてもめげないで聞いていようとする気持ちを高めること
- ・相手が何を伝えようとしているか漠然とわかる類推力を高めること
- ・聞いていて「わかった」と思える体験をたくさんすること
- ・英語は意味を伝える道具のひとつだと感じることに
- ・伝えられた意味がわかったらそれに反応したいと思うことに
- ・何とか英語 1 語で反応してみようという気持ちをもつことに
- ・母語習得の 1 歳半から 2 歳のレベルをめざすことに

- ・受信型コミュニケーション力を向上させること

②小学校教師がめざすこと

- ・英語をつかってみようと思う気持ちとその体験を増やすこと
- ・子どものコミュニケーションの相手は「先生」だと確信すること
- ・発信型コミュニケーション力を向上させること
- ・中学校 1 年生で学習する英語表現を再確認すること
- ・中学校 1 年生の英語の教科書に登場する表現で、伝えたいことを 15 分間話せること
- ・先生ができることを優先しないこと
- ・子どもにとって大切なことを優先すること
- ・一人より二人，二人より三人，三人より四人と輪を広げること
- ・若葉マークは 1 年でサヨナラと信じること
- ・先生自身が英語活動を楽しむこと
- ・教師や親がすぐに成果を見たがらないこと
- ・少なくとも 10 年後の教育効果を考えること
- ・すべての教科学習とどのようにつながるかを考えること
- ・高い理想を求めて教師がチャレンジすること
- ・小学校教育を少しでも豊かにする英語活動をめざすこと

③中学校英語教師や ALT がめざすこと

- ・小学校英語活動への興味と実践体験を増やすこと
- ・失敗を恐れず，それを次に活かすこと
- ・小学校教育は「肉じゃが作り」であることを理解すること
- ・自分ができることや中学校英語の指導方法を優先しないこと
- ・「文法・構造シラバス」以外のシラバスや新しい指導法についての研究をすること
- ・小学校教師へのより良いバックアップ方法についての検討をすること
- ・小学校英語活動が新しい英語教育への第一歩であることを感じる

